
紙飛行機

逢坂十七年蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紙飛行機

【Nコード】

N9082V

【作者名】

逢坂十七年蝉

【あらすじ】

校舎の屋上から飛び降りた「僕」が辿りついたの死後の世界は、何とも雰囲気欠ける場所だった。

思っていたよりも死後の世界というのはあっけらかんとしていた。ちようどどこかの町役場のような風情の処に『死亡係』やら『輪廻係』といった札が吊つてある。

ご丁寧なことに順番待ちの発券機まで用意してある具合だ。

「さて、どうしたもんかな」

学生服の襟を直しながら、僕は考える。

僕はこういうはじめての場所に来ると尻込みする性分なので、券も取らずにちよつとぶらぶらしてみることにした。

何せ覚えている限り死んだのは今回一度きりなので、何もかも新鮮だ。

財布の中の六文銭で買ったコーラを飲みながら役場を観察する。

どういう区分けになっているのか、この役場に来ている人は日本人が多い。

ここに来ているからには皆死んだ人なんだろう。

サバサバしている人もいれば、取り乱している人もいる。

それもそうか。

天国か地獄か何もないかと考えていたら、町役場じゃな。

雰囲気とか情緒なんてものにも、もう少し配慮してほしい。

死んでまで役場で行儀よく並んで書類を貰うなんて、実に日本人らしいといえれば日本人らしいけれど。

眺めていると、発券して窓口に並んだ人は書類を書かされてもう一度列に並ぶようだ。

となれば、先に書類を書いていた方が理に適っている。

何回も並び直すなんていうのは要領の悪い人間のすることだ。

書き損じた時の為に記入台には書類が備え付けてあった。

自然死用、他殺用、自殺用と種類あったので、僕は三枚目を取る。隣ではおばさんが「交通事故は他殺になるのかしらねえ」とこぼしていた。

生年月日に名前に本籍。

死んでまでこんなものを書類に書く羽目になるとは思わなかった。自慢ではないが数字を覚えるのが苦手な僕は、結局最後まで七桁の郵便番号を覚えることが出来なかった。

自殺の理由を選択する欄で、ふと気付いた。

この書類は何の為に書かされているんだろう。

書き続けるそぶりをしながら、もう一度窓口を確認する。

そこに書類を提出した人たちは、廊下の長椅子に腰かけて、次の指示を待っているようだ。

輪廻転生するのか解脱するのか、はたまた消滅するのかは分からない。

観察していると、どうやら行列はいくつかあるらしい。

耳を澄ませていると、死因で分けられているようだ。

自然死用、他殺用、自殺用。

自殺用の列だけ、異常に長い。

他の列は並んですぐにどこかに呼ばれていくようなのに、自殺用だけはずっと並んでいる。

まるで、この世の終わりまでそこに座っているような風情だ。

僕は、近くを歩いている役人風の男の人に尋ねた。

「あの行列は、随分待つんですか？」

「転生待ちの行列ですか？ 自然死か、他殺でしたらそれほど待ち

ませんよ」

「……じゃあ、自殺は？」

男の人は、眼鏡をちよつと持ち上げ、

「ずっとあそこに座っていることになります」と応える。

確か、先頭は弟橘比売命さんおとたちばなひめのみことじゃなかったかな？ と付け加えるのを僕は聞き逃さなかった。

冗談じゃない。

僕は男の人に礼を言い、自殺用の書類を丸めてポケットに突っ込んだ。

校舎から飛び降りたのは、こんなところで何千年も座り続けるためじゃない。

現実から逃げ出したかったのは確かだけど、こんなのはあんまりだ。改めて自然死用の書類を取り、全部書き直す。

死因も何もかも適当だ。

発券機で券を取り、順番を待つ。

これまで嘘なんて余りついたことがないのが自慢だったけど、死んでからこんな大嘘吐きになるとは思わなかった。手のひらにじつとりと嫌な汗が滲む。

「次、5567番の方」

僕の番だ。

緊張して、右足と左足が一緒に出そうになる。

窓口に座っていたのは趣味の悪い金縁の眼鏡を掛けた頭の薄い職員だった。

死後の世界にも老眼があるのか、手渡した書類を矯めつ眇めつ吟味

している。

「えーっと、死因は自然死で……」

駄目だ。

ドキドキして口から心臓が出そうだ。

ドキドキ？

「あ、あの、すみません……」

「はい、どうかされましたか？」

「僕、心臓が、その、動いてるみたいなんですけど？」

「……え？ あーじゃあ、臨死の方ですか。」
参ったな、と職員が頭を掻く。

「ちゃんと次は、正しい時期に来てくださいね」

その声を聞きながら、僕の意識は急激に薄れて行った。

「せ、先生！ 患者さんが！ 意識が戻りました！！」

眩しい。

どうやら僕は、無事に生き返ったらしい。

病院特有の匂いに、僕は自分の強運を感謝した。

意識が混濁していたとはいえ、変な臨死体験をしたものだ。

一般の病室に移ってから、気になって学生服のポケットを漁ってみた。

そこには、くしゃくしゃになった自殺用の書類が入っていた。

僕は皺を伸ばし、書類を丁寧に折っていく。

外はいい天気だ。

窓を開け、飛行機を飛ばす。

太陽の光に照らされ、飛行機は、すぐに見えなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9082v/>

紙飛行機

2011年10月8日04時40分発行